あいち朝日遺跡ミュージアム企画展

弥生農耕ことはじめ

－出土した農具から探る－

AICHI ASAHI SITE MUSEUM

あいち朝日遺跡ミュージアム

あいち朝日遺跡ミュージアム企画展

弥生農耕ことはじめ

－出土した農具から探る－

会期　2023年10月21日㈯～12月17日㈰
会場　あいち朝日遺跡ミュージアム　本館（企画展示室）

あいち朝日遺跡ミュージアム

例　言

- 本書は2023年10月21日から12月17日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「弥生農耕ことはじめ－出土した農具から探る－」の展示図録である。
- 本書の構成と実際の展示構成とは異なる部分がある。掲載写真は展示品の全てではない。また、参考として展示品以外の写真も掲載している（本館常設展示品を含む）。
- 本書の時期区分は、弥生時代早期（BC.10～BC.8c）、前期（BC.8～BC.4c）、中期（BC.4～BC.1c）、後期（AD.1～2c）、終末期（AD.2～3c）とするが、各地域の並行関係は厳密なものではない。なお、朝日遺跡等東海地方の弥生時代開始（前期）は、BC.6c と想定している。
- 掲載資料のうち重要文化財には「◎」、市指定文化財には「○」を付している。
- 資料の名称、表記について、所蔵先での名称等を一部変更しているものがある。
- 掲載写真・図等の出典、提供は巻末の図版資料一覧に掲載した。
- 本書の執筆・編集は、原田幹が行った。

ごあいさつ

「米」という字は「八十八」からできていると言われるように、稲作にはたくさんの手間がかかります。田起こしなどの水田準備から、水の管理、収穫、脱穀や籾摺りなどの調製まで、実に多くの工程を要し、そのなかには専用の道具を用いた作業もたくさんあります。

弥生時代に農耕が始まると、様々な農具が普及していきました。収穫に用いられた石包丁、脱穀や籾摺りに用いられた杵や臼は、農耕とともに大陸からもたらされた新しい道具でした。一方、大型石包丁のように、その役割がはっきりと説明されていない道具もあり、現在も研究が進められています。

本企画展では、九州から中部地方で出土した、収穫・調製（脱穀、籾摺りなど）に用いられた農具を取り上げ、弥生時代の人々がどのようにコメを収穫し、どのように保管・加工していたのか、弥生時代の農耕技術について考えます。

本企画展の開催にあたり、御協力いただきました所蔵機関をはじめ、関係者、関係機関に厚くお礼申し上げます。

2023年10月21日

あいち朝日遺跡ミュージアム

目次

例言 …… 2
ごあいさつ …… 3
目次 …… 4

Ⅰ 農具から探る …… 5
稲作技術と農具 …… 6
コラム 体験水田での稲作 …… 8

Ⅱ 収穫の道具 …… 9
弥生時代の収穫具 …… 10
弥生初期の水田と収穫具－菜畑遺跡 …… 12
九州北部の収穫具－吉野ヶ里遺跡 …… 14
コラム 左右交互刃石包丁 …… 16
鉄製の収穫具－吉野ヶ里遺跡 …… 17
瀬戸内の収穫具－南溝手遺跡 …… 18
石包丁から石剣に－南方遺跡 …… 20
木製の収穫具 …… 21
一括で埋められた収穫具－郡遺跡・倍賀遺跡 …… 22
コラム 石包丁と大型石包丁の使用痕と使用方法 …… 24
東海西部の収穫具－朝日遺跡 …… 26
信州南部の収穫具－恒川遺跡群 …… 28
コラム 炭化した稲穂束 …… 30

Ⅲ 調製の道具 …… 31
竪杵と臼 …… 32
コラム 東南アジアの脱穀・籾摺り …… 34

Ⅳ 稲藁利用の可能性 …… 35
横槌 …… 36
藁たたき槌と藁たたき石 …… 38
土器の覆い焼きと土器の黒斑 …… 40

Ⅴ 蓄える …… 41
壺の造形 …… 42
高床建物が描かれた土器 …… 43
高床倉庫 …… 44

資料 …… 45
出品資料一覧 …… 46
図版資料一覧 …… 47
主な参考文献 …… 48
協力者一覧 …… 48

Ⅰ

農具から探る

1 弥生時代の農作業 朝日遺跡復元模型
本館基本展示室

あいち朝日遺跡ミュージアムの基本展示室には、朝日集落の構造や生活の様子を描いた精巧な模型が展示されている。本企画展を観覧する前に、ぜひ「農地での活動」模型を御覧いただきたい。田起こしから始まり、田植え、草取り、収穫作業まで、水田での農作業の様子をみることができる。また、水田の奥にはアワやキビの畑がある。さらに、収穫した後の乾燥、脱穀・籾摺(もみす)り、風選(ふうせん)、稲藁の加工といった様々な作業を取り上げており、農耕の一連の作業がイメージできるだろう。

そして、個々の農作業には、考古学的に検証すべき多くの課題も含まれている。

弥生時代に広まった農耕は、アワやキビなどの雑穀とコメを作物とする稲作があるが、食料としての比重は、一部の地域を除けばコメが高く、水田稲作がその中心であったと考えられている。稲作には様々な工程があり、それぞれの作業に特化した道具が用いられてきた。

本企画展では、主に稲作の後半の工程に当たる「収穫」から「調製」に関する作業とこれらの作業に関わる出土品を取り上げ、弥生時代の稲作技術について考えていく。まずは、稲作の基本的な工程とこれに必要な道具を対比させながら、水田稲作技術の概要を把握しておこう。

○水田の準備

耕起（田起こし）、水路や水口の整備、代掻きなど。

耕起には、人力による鍬・鋤耕、畜力の牽引による犁耕、家畜の踏みつけによる踏耕、耕耘をしない無耕起法がある。弥生時代にはまだ牛や馬などの家畜はなく、鍬･鋤耕が行われていた。また、無耕起法についても、その可能性が検討されている。

＜主な道具＞鍬､鋤､エブリ､田下駄（大足）など。

2　田起こし　朝日遺跡復元模型

3　◎木製鋤・鍬　朝日遺跡
弥生／あいち朝日遺跡ミュージアム蔵

○栽植と中耕・除草

水田にイネを植える作業には、苗を植える移植法と直接種籾を植える直播き法がある。弥生時代については、直播き法が考えられていたが、岡山県百間川原尾島遺跡の水田跡で見つかった稲株の痕跡が規則的に並んでいたため、移植法が行われていたと想定されるようになった。しかし、直播きには散播だけでなく点播、条播などの方法もあり、そう単純にとらえることはできない。

田植え後は、水の管理、除草、施肥、病虫害防除などの管理が行われる。

＜主な道具＞田下駄（大足）、田舟など。

4　田植え　朝日遺跡復元模型

○収穫・乾燥

出穂、開花した穂は、やがて登熟し、収穫期をむかえる。収穫方法には、イネの根本から刈り取る根刈りと、穂首よりやや下で刈り取る穂刈り（穂摘み）、茎の中程で刈り取る高刈りなどの方法がある。

石包丁などの穂摘み具は、稔った穂を１本ずつ摘み取っていく作業に用いられた。弥生時代のイネは穂の成熟時期にバラツキがあったため穂摘み・穂刈りが一般的で、鉄鎌が普及した古墳時代以降根刈りが普及したと考えられてきた。しかし､弥生時代には､大型石包丁のように根刈りを想定できる道具もあり､鉄鎌と根刈りを直接結びつけられるかについても議論の余地がある。

＜主な道具＞石包丁、石鎌、大型石包丁（大型直縁刃石器）、木包丁、木鎌、摘鎌、鉄鎌など。

○脱穀・調製

稲穂から籾を分離する作業を脱穀といい、打ちつけ、踏みつけ、穂をしごくなどの方法がある。弥生時代には、竪杵と臼が用いられていた。なお、日本では江戸時代以降、千歯扱きが考案され、やがて足踏み式脱穀機が用いられるようになった。

脱穀後は、脱稃（籾摺り）や精米（精白）を経て、風選により籾殻や藁片とコメを分離する。竪杵と臼を用いると、同一の道具で、脱穀だけでなく籾摺りや精米の工程も行うことができる。

＜主な道具＞竪杵、臼、箕など。

○貯蔵

稲穂や脱穀された籾は、壺や籠に入れ保管された。貯蔵施設としては、貯蔵穴や高床倉庫が考えられる。

＜主な道具＞壺、籠、貯蔵穴、高床倉庫

○水田に関連する問題

水田は、食料としてのコメを作る場であるが、弥生時代の水田運営の実態解明には他にも様々な問題がある。

・刈り取り後の水田はどのように管理されていたか。
・稲藁は利用されていたのか。
・水田及びその周辺で行われた生業。漁や狩りなど。

5　収穫　朝日遺跡復元模型

6　石包丁による穂摘みと大型石包丁による根刈り

7　収穫後の調製作業　朝日遺跡復元模型

8　ヤナによる漁　朝日遺跡復元模型